

令和4年度「地域づくり表彰」表彰式 実施報告書



イベント開催で「ほそのファン」獲得（山形県尾花沢市）



古い米倉庫を集合型店舗に再生（長崎県東彼杵町）



若者主役の「まちつく」メンバー（栃木県真岡市）



団地内シェアキッチンでジャズライブ（埼玉県北本市）



授業見学会に県内外から来訪（山口県萩市）



利用者と地域住民による定期交流会（福岡県久山町）



再生された田んぼで子供達と田植え（広島県広島市）



手作りの水鉄砲などで川遊び（徳島県吉野川市）

令和5年2月
令和4年度「地域づくり表彰」事務局

はじめに

令和4年度の「地域づくり表彰」表彰式については、新型コロナウイルス感染予防の観点から、前年度に引き続き、受賞団体の意向を踏まえつつ、主として各受賞団体の所在市町村役場、国土交通省本省庁舎等において、それぞれの幹部あるいは本省職員より、個別に表彰状を手交し、各地の地元紙等で取り上げられました。

本報告書は、令和4年11月1日から12月14日までに実施した各地の表彰式についてその実施状況を報告するものです。

本事業の実施について、ご協力を頂いた皆様に厚く感謝申し上げます。

令和4年度「地域づくり表彰」事務局

目 次

令和4年度「地域づくり表彰」表彰式 各地の様子

参考1. 「地域づくり表彰」制度の概要

参考2. 令和4年度「地域づくり表彰」総評

参考3. 令和4年度「地域づくり表彰」審査会委員名簿

参考4. 「地域づくり表彰」受賞団体の概要

参考5. 「地域づくり表彰」歴代受賞団体の活動状況

令和4年度「地域づくり表彰」表彰式 各地の様子

表彰状の授与は、新型コロナウイルス感染予防の観点から、各受賞団体の意向に沿って、11月上旬から12月中旬にかけて、感染リスクの少ない形で個別に各地域等で開催させていただきました。

【国土交通大臣賞】

清流と山菜の里 ほその村

(山形県尾花沢市)

日時：令和4年11月11日（金）13時30分～

場所：尾花沢市文化体育施設

受領者：「清流と山菜の里 ほその村」

会長 五十嵐 幸一 様

授与者：国土交通省 国土政策局

佐藤 哲也 地方振興課長



(備考)

・五十嵐会長「足元を見つめ直し、地域の資源を掘り起こしながら続けてきた活動が認められ、うれしい。衰退していく集落を立て直すため、困りごとをそのままにせず解決に向け取り組んできた。交流人口が増え、移住者も少しずつ出てきた。何度も訪れたいくなる地域をつくるため精進したい。」

- ・山形新聞等に記事掲載
- ・さくらんぼTVで紹介

【国土交通大臣賞】

一般社団法人 東彼杵ひとことものの公社

(長崎県東彼杵町)

日時：令和4年12月5日（月）13時30分～

場所：国土交通省 本省3号館 8階特別会議室

受領者：「一般社団法人東彼杵ひとことものの公社」

代表理事 森 一峻 様

授与者：国土交通省 古川 康 大臣政務官



(備考)

・森代表理事「古川政務官から【東彼杵町のように自分たちもやりたいという人が出てほしい】と激励を受け、身が引き締まる思いがした。」

- ・長崎新聞に記事掲載

【全国地域づくり推進協議会会長賞】

真岡まちづくりプロジェクト

(栃木県真岡市)

日時：令和4年11月30日（水）14時～

場所：国土交通省 本省2号館 11階会議室

受領者：「真岡まちづくりプロジェクト」

プロジェクトメンバー 今西 蓮 様

授与者：国土交通省 吉田 幸三 大臣官房審議官



(備考)

・今西蓮様からの受賞者答辞

「このたびは地域づくり表彰 全国地域づくり推進協議会会長賞をいただき、ありがとうございます。去年の夏、私は高校3年生で「真岡まちづくりプロジェクト」に参加しました。一人での参加でとても緊張していたのを、今でも覚えています。ですが、すぐに緊張は解け、まちつくメンバーの一員になることができました。

今年は、運営メンバーとしての参加で、大学の先輩や大人メンバー、様々な人に支えられて2年目の活動もやり遂げることができました。

今後とも、真岡まちづくりプロジェクトをよろしくお願いいたします。」

【全国地域づくり推進協議会会長賞】

合同会社 暮らしの編集室

(埼玉県北本市)

日時：令和4年11月17日（月）13時～

場所：北本市役所

受領者：「合同会社 暮らしの編集室」

代表社員 岡野 高志 様

授与者：北本市 三宮 幸雄 市長



(備考)

【国土計画協会会長賞】

ささラブ応援隊

(山口県萩市)

日時：令和4年11月1日（火）14時～

場所：萩市役所

受領者：「ささラブ応援隊」

隊長 廣田 雅央 様

授与者：萩市 田中 文夫 市長



(備考)

・廣田隊長「とても素晴らしい賞を頂き光栄に思っている。」

「この賞を糧にさらにチャレンジしていきたい。」

・萩市 田中市長「山口県のみならず全国的にも非常にユニークな取り組み。」

「小学校を存続させ次の移住の皆さんの後押しになるだろう。」

「市としてできることはなんでもする。」

・山口新聞に記事が掲載

【日本政策投資銀行賞】

久山町

(福岡県久山町)

日時：令和4年12月14日（水）13時30分～

場所：地域交流型シェアオフィス「そらや」

受領者：福岡県久山町 町長 西村 勝 様

授与者：株式会社 日本政策投資銀行

原田 文代 常務執行役員



(備考)

・西村町長「チャレンジすることで未来が生まれる。今後も地域課題と向き合い、課題解決の先進的な自治体として頑張りたい」

・西日本新聞に記事掲載

・NHK福岡県のニュースで紹介

【地域づくり表彰審査会特別賞】

一般社団法人 ふるさと楽舎

(広島県広島市)

日時：令和4年11月24日(土)9時～

場所：広島市役所

受領者：「一般社団法人 ふるさと楽舎」

代表理事 秦野 英子 様

授与者：広島市 松井 一實 市長



(備考)

・ 秦野代表理事「まだまだ活動が地についていない中、望外の表彰を受け、メンバーの今後の活動の励みになる。」

・ 斉藤国土交通大臣が11月23日の祝日に開催された地域のお祭り「木と食の里まつり」において、「一般社団法人 ふるさと楽舎」も参加している中で、地域づくり表彰審査会特別賞を受賞したことを報告され会場が盛り上がりました。

【地域づくり表彰審査会特別賞】

特定非営利活動法人

美郷宝さがし探検隊

(徳島県吉野川市)

日時：令和4年12月14日(土)14時～

場所：「美郷ほたる館」

受領者：「特定非営利活動法人

美郷宝さがし探検隊」理事長 明石 光弘 様

授与者：国土交通省 四国地方整備局

栗原 正夫 建政部長



(備考)

・ 明石理事長「新型コロナウイルスの影響で開催出来ていないイベントもある中、これまでの実績を評価していただけたことはありがたい。もっと多くの人に美郷を訪れてもらえるよう、活動を続けていきたい。」

・ 徳島新聞に記事掲載

・ NHK徳島県のニュースで紹介

参考 1. 「地域づくり表彰」制度の概要

1. 目 的

地域づくり表彰制度は、創意と工夫を活かした優れた自主的活動で、広域的な地域づくりを通して、地域の活性化に顕著な功績があった優良事例を表彰することにより、地域間の連携と交流によって地域の個性ある自立を広範囲にわたり促進し、地域づくりの奨励を図ることを目的としています。

2. 方 針

当地域づくり表彰制度は、多様な分野での地域づくりに対して、包括的な観点から優良事例を選定・表彰するものです。表彰の対象は、次のいずれかに該当する地域の活性化に顕著な功績があった地方公共団体・団体・個人です。

- (1) 創意工夫を活かした優れた自主的活動等を基本とする地域づくりを通して、地域の活性化に顕著な功績のあったと認められるもの
- (2) 地域づくり行政を通して地域の活性化に顕著な功績のあったと認められるもの
- (3) その他地域間の連携と交流による地域の活性化に関し、特に表彰が必要と認められるもの

3. 表彰部門

(1) 小さな拠点部門

中山間地域等において、基幹集落に複数の生活サービスや地域活動の場を集め、周辺集落とネットワークで結ぶ「小さな拠点」を形成し、地域住民の生活サービス機能を維持するとともに、地域外から所得を獲得し、または地域内外の住民の交流を促進する取組等を対象とします。

(2) 地域づくり部門

上記取組以外で、地域活性化を図るため創意と工夫を活かした優れた自主的活動で広域的な地域づくりに係る取組を対象とします。

4. 審査の視点

審査会は、主に次のような視点に重点を置いて行われます。

(1) 活動の広がり

地域づくりの取組が、地域ぐるみで、広範囲に行われているか。

(地域の一体的な取組や、多様な主体との連携により、活動の規模や交流の範囲が年々広がっているかなどがポイントです。)

(2) 継続性

地域づくりが継続的に実施されているか。

(活動を続けていることに加え、新たな取組を創出し、年々内容が充実しているかなどがポイントです。)

(3) 地域資源の活用

地域づくりに地域資源がどのように活かされているか。

(地域資源のブランド化、普及促進など、地域の特産・歴史・文化・自然・環境等の特性が十分に活かされ、地域資源が最大限に活かされているかなどがポイントです。)

(4) 創意工夫

創意工夫を活かした、独自の地域づくりが行われているか。

(他の参考となるような先進的・先導的な発想、工夫を凝らした取組があり、独自の地域づくりが行われているかなどがポイントです。)

(5) 成果

地域づくりの成果が着実に上がり、地域の活性化につながっているか。

各部門で、以下のような効果をもたらした地域活性化に寄与しているかがポイントです。

① 小さな拠点部門

「小さな拠点」を形成し、地域住民の生活サービス機能を維持するとともに、地域外から所得を獲得し、または地域内外の住民の交流を促進する等の効果をもたらした、地域活性化に寄与しているか。

② 地域づくり部門

地域の文化の再発見や地場産業への効果など、様々な面で地域づくりの枠を越えた効果をもたらした、「付加価値を高める地域づくり」となっているか。

5. 各賞の決定

地域づくり表彰審査会では、審査員による書類審査等の結果を踏まえ、以下の各賞を決定します。

(1) 国土交通大臣賞

各部門において、地域の活性化に特に顕著な功績があり、当該活動が主として「活動の広がり」「継続性」「地域資源の活用」「創意工夫」「成果」の視点(評価基準)に重点をおいて審査し、総合的に高い評価を受けた優良事例

(2) 全国地域づくり推進協議会会長賞

地域の活性化に顕著な功績があり、評価基準では総合的に高い評価を受けるに至らなくても、特定の分野で優れた活動を長期間にわたり行うことにより、地域づくりに多大な貢献をしていると認められた優良事例

(3) 国土計画協会会長賞

地域の活性化に顕著な功績があり、国土の利用・整備及び保全あるいは地域間交流の促進に寄与し、地域づくりに多大な貢献をしていると認められた優良事例

(4) 日本政策投資銀行賞

地域づくり活動を通じ、産業の振興開発を促進し、経済の発展に顕著な功績があった事例

(5) 地域づくり表彰審査会特別賞

地域づくりの奨励の観点から、審査会において表彰することが必要と認められた事例

以 上

参考 2. 令和 4 年度「地域づくり表彰」総評

令和 4 年度地域づくり表彰審査会 座長 坂田 一郎
(東京大学 地域未来社会連携研究機構 機構長 兼 工学系研究科教授)

創意と工夫を活かした個性ある地域づくり活動を奨励する「地域づくり表彰」につきましては、昭和 59(1984)年から始まり、今回が第 39 回目となります。

今年度も 全国各地から昨年度を 2 件上回る 計 32 件の多様な事例が推薦されて参りました。

厳正な審査の結果、今年度は、総合的に最も優れた事例を表彰する「国土交通大臣賞」2 事例、地域活性化で極めて優れた事例を表彰する「全国地域づくり推進協議会会長賞」2 事例、国土政策の観点から優れた事例を表彰する「国土計画協会会長賞」1 事例、地域経済や産業振興の観点から優れた事例を表彰する「日本政策投資銀行賞」1 事例、地域活性化で優れた事例を表彰する「地域づくり表彰審査会特別賞」2 事例の計 8 事例を表彰することといたしました。

今年度は、いずれの事例も、地域の危機感を明確に意識しつつも、それに怯まず「ピンチを、チャンスに」という発想のもと、地域愛を核とした「地域の視点」「地域のニーズ」「地域の文化」「地元の歴史の尊重」「地域の良いところを外に発信したい」等の、地域づくりの本来の価値観を大切にすることを心がけておられたことが特徴だったと感じました。それを逆に言い表した「いたずらに数を追わず、無理に外に合わせない」という言葉も印象に残りました。

また、複数年続いたコロナ禍で得られた知見として、フェイス・トゥ・フェイスで繋がる意義と価値が、より広く、より強く認識されていたことです。「人と人との繋がり」「顔の見える関係」という言葉が、各団体の説明に何度も登場した点がそれを表していたと感じます。

手法については、従来、「負の遺産」と捉えられがちな耕作放棄地・老朽団地等、低・未利用の公共空間・施設等を、人々が出会い、自然に集える「居場所」として再定義して、それらの再生を目指した試みも多く見られました。

これらは、利用に際し大きなコストが掛かりにくい点でも有利であったかと思えますし、そのことで、肩に過度に力が入らない、ゆったりとした、お取組の態度にも表れていたと感じます。

無理に「人を集める」のではなく、自然と「人が集まる」場づくり、そのために、著名で特別な観光資源に頼らずとも、外部の方々との協力も得ながら皆で地域独自の魅力を見出し、その魅力を軸として人に出会うこと・関わることを大切にしてゆく取組は、これから、どの地域でも真似ができ、全国各地に勇気とやる気を起こさせるものとして、是非ご紹介申し上げたい事例であると感じた次第です。

審査会でも「コロナ禍で新たな価値を認識した、改めて日常の大切さに思い至った。そのことは良かった」というお話もあり、山あり谷ありのピンチに直面しても、地域の価値観を大事にし新たな取組に挑戦できた地域が、結果として持続可能な地域になっているようにも感じました。

新旧の公共空間だけでなく、人口流出やコロナ禍等も含めた「負の遺産」を再認識し、改めて人々が出会い・自然に集える「場」や活動着手のきっかけとする試みは素晴らしいものであり、同じような悩みを抱える全国各地の地域づくりのヒントや指針になるものと確信しております。

受賞各団体におかれましては、表彰を機に、ますますの活発な取組みを進められることをご祈念申し上げるとともに、全国各地の皆さまが、各表彰事例をご参照され、地元の施策の参考としていただき、機会がありましたら、事例の地を訪れ、当事者の皆様とご交流されること等により、個性的で魅力ある新たな地域づくりの輪が、更に広がっていくことを期待しております。

参考3. 令和4年度「地域づくり表彰」審査会委員名簿

(有識者委員)

いとう	さとこ	伊藤聡子	フリーキャスター
さかた	いちろう	坂田一郎	東京大学 地域未来社会連携研究機構機構長 兼 工学系研究科 教授
さんべ	ひろみ	三瓶裕美	「つちのと舎」代表、総務省地域力創造アドバイザー、 地域おこし協力隊サポートデスク専門相談員
せだ	ふみひこ	瀬田史彦	東京大学大学院 工学系研究科 准教授
ふじ	い	藤井 さやか	筑波大学 システム情報系社会工学域 准教授
ほり	ぐち	まさひろ	株式会社 第一プロGRESS 代表取締役社長 兼 TURNS プロデューサー

(50 音順、敬称略)

(共催・後援者委員)

みね	たつろう	峰達郎	全国地域づくり推進協議会 会長（唐津市長）
おおた	ひでや	太田秀也	一般財団法人 国土計画協会 専務理事
はらだ	ふみよ	原田文代	株式会社 日本政策投資銀行 常務執行役員
よしだ	こうぞう	吉田幸三	国土交通省 大臣官房審議官

(敬称略)

参考 4 令和 4 年度「地域づくり表彰」受賞団体の概要

【国土交通大臣賞】

- 清流と山菜の里 ほその村（山形県^{おばなざわし}尾花沢市）
- 一般社団法人 東彼杵^{ひがしそのぎ}ひとこともの公社（長崎県^{ひがしそのぎちょう}東彼杵町）

【全国地域づくり推進協議会会長賞】

- 真岡^{もおか}まちづくりプロジェクト（栃木県^{もおかし}真岡市）
- 合同会社 暮らしの編集室（埼玉県^{きたもとし}北本市）

【国土計画協会会長賞】

- ささラブ応援隊（山口県^{はぎし}萩市）

【日本政策投資銀行賞】

- 久山町（福岡県^{ひさやままち}久山町）

【地域づくり表彰審査会特別賞】

- 一般社団法人 ふるさと^{がくしや}楽舎（広島県^{ひろしまし}広島市）
- 特定非営利活動法人 美郷^{みさと}宝さがし探検隊（徳島県^{よしのがわし}吉野川市）

（以上、8 団体全て「地域づくり部門」、順不同）

地域づくり表彰

清流と山菜の里 ほその村
(山形県尾花沢市)

地域資源を活かし集落活性化

清流と山菜の里
ほその村

会長

五十嵐 幸一



1. 尾花沢市の概要

尾花沢市は、山形県の北東に位置し、標高は70mから1,500mと起伏に富み、奥羽山脈や出羽丘陵などの山々に囲まれた盆地を形成しています。短い日照時間と低温、多湿、多雪のため、春の融雪が遅く、農耕期間が短いのが尾花沢盆地の特徴です。冬の季節風が山々の稜線にさえぎられ、雪を多く降らせるため、平野部でも積雪量が2mに及ぶことがある豪雪地帯です。

雪によってもたらされた豊かな水と、尾花沢盆地特有の朝夕の寒暖差の激しい気候は、多くの農産物を育みます。中でも、夏スイカの生産量は日本一。「尾花沢スイカ」のブランドで全国各地に出荷されています。スイカの他にも、肉牛の肥育や、そばの生産にも力を入れています。尾花沢牛の肥育頭数は東北一。尾花沢そばは、作付面積県内一で味もよく香り高いそばが打ちあがります。

大正から昭和初期の木造旅館が立ち並び大正ロマン漂う「銀山温泉」には国内外からお客様が訪れ、灌漑用の人造湖「徳良湖」は、全国的に有名な「花笠音頭」の発祥地です。

紀行文「おくのほそ道」で知られる俳人、松尾芭蕉は、尾花沢の友人鈴木清風を訪ね、先を急ぐ道中にあって10泊も逗留しています。清風の手厚いもてなしに、芭蕉は旅の疲れを癒したといいます。現在でも、尾花沢市民はこうしたおもてなしの心を大切にしています。



大正ロマン漂う「銀山温泉」

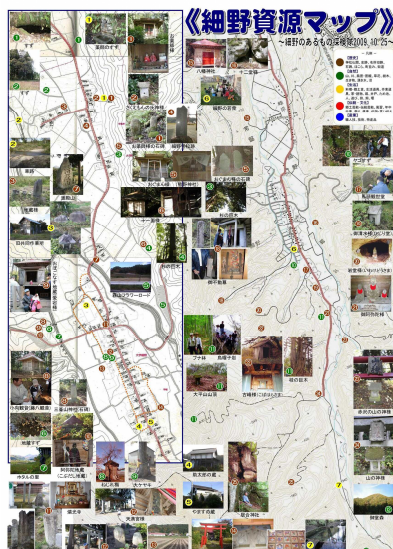
2. 活動開始の背景・経緯

細野集落は、71世帯196人が暮らす小さな山あいの集落です。少子高齢化・過疎化の進行により、集落を維持していくための共同作業、防災活動、季節行事、文化や技能の伝承などの集落機能の低下、また、農業者の高齢化や担い手不足により、耕作放棄地が年々増加し、農作物の鳥獣被害や景観の悪化などが危惧されていました。



細野集落の全景

住み慣れた地域で楽しく住み続けるためには、みんなで知恵を出し合い、工夫して行動を起こすことが重要と考え、山形県や尾花沢市の事業による「地域づくり講座」や「地域のお宝探検事業」に積極的に取り組み、足元にある地域資源を再認識する活動を始めました。



地域のお宝マップ

県内外の先進事例視察等を経て、集落にある豊かな自然・文化・歴史・景観等を活用して、都市と農村の交流や地域資源の有効活用を図り、10年先20年先を見据えた新しい地域づくりに挑戦することになりました。

細野集落の活性化に取り組むために、話し合いの場づくり・認め合う人間関係づくり・価値観の共有・何事にもチャレンジする・地域資源を活用した雇用創出・少子化対策を目標として、平成22年4月に地域内の全戸が参加する「清流と山菜の里ほその村」を設立しました。



地域づくり講座の様子

3. 活動の内容

《地域資源を活用した交流事業》

村の景観保全と荒廃農地の拡大抑制のため、転出者や離農者の農地を借り受け、そば栽培やワラビ園を造成しています。ワラビ園は地域を訪れる方の増加に寄与し、そばは新そばまつりや各イベントで提供するほか、味噌蔵を改修した農家レストラン「蔵」のメインメニューになっています。

また、そば畑のオーナー制を実施しており、年3回のイベントを開いて体験交流を行っています。



秋のそば打ち体験

交流事業として、四季折々のイベントを実施しており県内外から多くのお客様が細野集落を訪れます。

5月の春山登山と山菜狩りツアーでは、やまがた百名山に選定されている大平山登山と山菜の王様アイコが取れる山菜狩りを体験。細野を熟知した地域住民が案内役です。



山菜狩りツアー

夏から秋にかけてのそばオーナー事業として、そばの種蒔き、そばの花鑑賞、新そばでのそば打ち体験のほか、ブルーベリー収穫体験、里芋収穫体験、漬物体験などを通して細野を満喫してもらっています。

11月には新そばと味覚まつりを開催して、新そばやキノコ料理を堪能してもらい、冬の親雪メープルサップ採取体験には、多くの親子らが参加して、地域に自生するイタヤカエデの樹液を採取し、雪遊びに興じます。



メープルサップ採取体験

どの事業も農家レストラン「蔵」で参加者と住民との交流会を行い、「ただいま」と何度も訪れていただけるよう、顔の見える関係づくりを心掛けています。



参加者と住民の交流会

《女性の活躍事業》

地域内の女性による「友輪会」を組織して、空き家の農作業小屋を改

修した「母ちゃん広場」で農産物加工品の製造・販売や、イベント等の料理の提供、農家レストラン「蔵」の運営にあたっています。

農家レストランは、地域活性化の拠点であると同時に、お母さんたちがおしゃべりする場となっており、自分たちの元気の拠点にもなっています。

レストランで提供する、イワナの唐揚げと手打ちそばをメインに、旬の野菜で付け合わせの小皿が変わる「季節の田舎膳」が人気です。



季節の田舎膳

4. 成果

《伝統行事の復活》

細野集落で長年途絶えていた、農作物につく害虫を駆除して豊作を祈願する伝統行事「虫送り」が復活しました。虫送りが行われていた当時のことを知る高齢者と行事の主役となる親子、消防団員が協力し、集落を挙げての世代を超えた交流行事となっています。

《支え合いの地域づくり事業》

定期的な役員会や各種イベント開催に関わることで、コミュニケーションが高まり、誰もが憩える桜公園の造成や集落除雪活動につながりました。

雪国で暮らすうえで高齢者が一番困るのが雪ですが、身内で処理していた除雪も、高齢化や人口減少によって困難になっている声を踏まえ、ほその村に「除雪隊」を組織して高齢者や除雪困難者宅、空き家等の冬期間の除雪作業を行っています。昨シーズンは、高齢者宅17戸と空き家3戸で実施しました。



除雪隊の活動

《地域活性化の活動からの広がり》
やまがた百名山に選定された「大

平山」「御堂森」には、年間約3,000人の登山愛好者が訪れますが、安全確保と景観保全のため、登山道の整備、新規登山道の開設を行っています。登山道整備に伴って、技術向上が図られ、地元の森林組合より3名の雇用に繋がりました。

また、毎年1,500人を超える多くの方が交流事業で村を訪れます。参加者の中で村づくりを手伝いたいと空き家に移住した方が、古民家カフェや民宿を開業され、地域活動の幅が広がりました。

移住者の提案で、使われない農作業小屋を「ほその村ミュージアム」に整備して移住者の作品と地域の農産物や工芸品を展示・販売したことで、イベントや登山で訪れる方たちに立ち寄っていただき、新たな細野ファンの獲得に繋がっています。



ほその村ミュージアム

5. 課題と展望

新型コロナ感染拡大の影響で、イベント開催や農家レストラン運営を休止したり、取引のあった仙台市のカフェでも営業を縮小してメープルシロップの在庫を抱えたこともありました。その際も、知恵を出し合って、細野産のホップとメープルシロップを使ったクラフトビールの企画・販売を行いました。ピンチをチャンスと捉え、何もない田舎だからこそ故郷らしい親しみある「にぎやかな田舎」づくりの挑戦を続け、地域資源を活用したビジネスや地域産業が生まれて働く場が確保され、住民生活の安定に繋がるよう活動していきます。



ほその村の住民たち

地域づくり表彰

東彼杵ひとことものの公社（長崎県東彼杵町）

地域の「ひと」×「こと」×「もの」
掛け合わせて「自分ごと」の未来づくり一般社団法人
東彼杵ひとことものの公社

代表理事

もり かずたか
森 一峻

1. 東彼杵町の概要

長崎県の中央部に位置する東彼杵町。丘陵地の棚田や段々畑が広がり、特産「そのぎ茶」や米、果樹などの栽培が盛んです。古くから街道が交わる交通の要衝であり、長崎、佐世保両市までJR大村線で約1時間、長崎空港まで車で約30分と交通利便性が高い立地です。



茶畑の美観が広がる東彼杵町

2. 活動開始の背景・経緯

東彼杵町東部に位置する千綿地区。近年は小売店を中心とする生業が徐々に減り、活気が失われています。愛着ある故郷にかつての賑わいと街並みを取り戻したい。

この土地に息づく資源を自らの手で磨き、次代に繋ごうとする機運が地元の若手を中心に少しずつ高まっていました。

最大のきっかけは、一軒の古びた米倉庫のリノベーション。古里の再生に向けた拠点づくりとして、住民有志でまちづくりグループを結成し、解体寸前だった旧米倉庫の改修を町に提案しました。

そして平成27年12月、「Sorriso riso（ソリッソリッソ）」が完成。カフェやアンティークショップなどの店舗だけでなく、誰でも利用できる共有スペースを設置し、地域住民が気軽に集える「場」をつくりました。

イタリア語で「微笑みの米」と名付けたこの交流拠点を通して、町の認知度向上と交流人口の拡大を図っています。



かつての米倉庫「ソリッソリッソ」

その後平成29年、一連の活動を継承し、町民有志で「（一社）東彼杵ひとことものの公社」を設立しました。地域商材の開発や拠点開発のサポート運営および地域のリレーションをはかるイベントやプロモーションを手掛けています。

3. 活動内容

公社の活動の柱は、特産「そのぎ茶」をメインに、東彼杵町を感じられるこだわりの品々を取り扱うセレクトショップ経営とポータルサイト運営です。移住者も巻き込みながら、情報発信や担い手育成を積極的に展開しています。

コンセプトは「まちづくりは人づくり」。町内で事業を起こし、生業を営もうとする人のサポートを通じて、一人ひとりが熱を持って課題解決と自分らしい暮らしの追求に挑む空気を生み出しています。



こだわりの溢れる「くじらの髭」

セレクトショップ「くじらの髭」では、オリジナルパッケージで価値を付加した「そのぎ茶」に加え、町で生産されている菓子や農産加工品

などを取り扱っています。

ただ、町に元々ある良品が町外消費者に届きにくい現状もあります。そこで、ショップと同名のウェブサイト「くじらの髭」を構築してインターネット販売を展開するとともに、町が秘める魅力を多彩に発信しています。

また、「ひと」「こと」「もの」「みせ」等のジャンルに分け、それらに関わる町民らの思いをとことん深掘りしてウェブ記事で紹介。取材活動を通して各事業所との連携も深めながら、表面的ではない魅力の発信に努めています。ここは単なるショップではなく、商品を通して各生産者さんの背後にあるストーリーやコンセプト、何より熱を届ける場所なのです。



「ひと」を紹介するウェブサイト

かつての米倉庫周辺に次々と派生するユニークな店舗や、県内外でその魅力が再評価されている既存の観光スポット「千綿駅」など、これまで町に眠っていた「点」がにわかに結び付き、太い「線」が生まれ始めています。公社ではその線をさらに繋ぎ、魅力的な「面」への拡大を楽しみながら進めています。

4. 活動の広がり

「この町だったら、この地域だから、やれそうな気がしたんです」。東彼杵町で平成29年、子育て中のママ友と花屋「ミドリブ」を始めた飯塚陽子さんは関東からの移住者。たと

え慣れない土地でも、町内に次々誕生する店舗や、全体を包むポジティブな雰囲気に「背中を押された」と話します。私たちは平成25年から千綿地区でチャレンジ出店などを支援してきました。「地区内で1年に1軒以上の新規出店」という目標を大きく上回り、8年後には約25店舗が誕生しました。

ちなみに「ミドリブ」は令和4年から千綿駅舎内に店舗を構え、お客さんを笑顔で迎えています。



駅舎内に店舗を構える「ミドリブ」

5. 「今」を記録し、「未来」へ

公社では町民や各店主を取材し、記事にまとめて情報発信する取り組みを続けています。その理由は、「今」を「未来」へ残すため。一過性の情報にとどまらず、町に関わる人々の声を通して町の魅力や課題を顕在化し、アーカイブとして蓄積することを目指しています。

6. “他力、もウェルカム

令和2年には地場産業の活性化や交流人口拡大などを目的に、九州電力と組んで新事業に着手。その成果として、令和4年に千綿地区で新たな交流拠点「umino わ」を開業しました。他力をオープンに受け入れる姿勢も公社の特徴です。



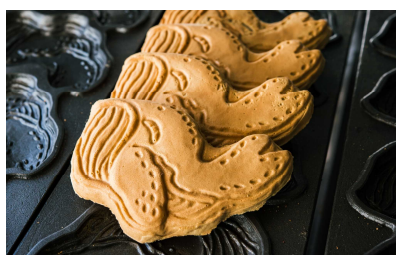
新たな交流拠点「umino わ」

7. 歴史をクリエイティブに再構築

東彼杵町がかつて鯨肉の流通拠点として栄えた歴史を今によみがえらせようと、公社では鯨をモチーフとしたたい焼き風和菓子「くじら焼」を九州電力と協働で開発しました。

大海を回遊する鯨をイメージして、移動販売車というユニークな販売形態を採り、町内外での広い認知と販売に成功しています。

併せて、ほうじ茶を練り込んだ皮とあんをセットにし、鯨をモチーフとするパッケージで包装した「くじら最中」も商品化。これらは地域ブランド「CHANOKO」として展開し、長崎県主催「長崎デザインアワード2021」で全82商品の中から金賞に輝きました。私たちが大切にしている「地域のルーツ」を丁寧に辿りつつ、クリエイティブに発信する取り組みが評価されたことは、大きな励みとなっています。



町の歴史を感じられる「くじら焼」

「ソリッソリッ」として再生した「旧千綿村農協米倉庫」は令和2年、長崎県まちづくり景観資産（建造物）に登録されました。取り壊し寸前だった遊休施設が、リノベーションを経て、町のランドマークとして再び輝きを取り戻しました。

また、無人駅のJR千綿駅も、そのレトロな外観やホームから望む大村湾の絶景など、その価値を再構築して広く発信することで、今では町の観光資源となっています。

8. 課題先進地。だから面白い

東彼杵町では、町内に仕事がないために人材が町外へ流出してしまう現状があります。公社では「まちづくりは人づくり」の理念の下、その課題解決に向け、町内での就労と生活を実現させようと、記事執筆を請け負うライター育成に着手しました。「町内に暮らし、書くほど収入が増える」というビジネスモデルの構築により、情報発信と収益化の好循環を生み出そうとしています。

併せて、県内大学との連携体制も構築。「課題先進地」を逆手に取り、フィールドワークの場として学生のキャリア教育に貢献しています。ラ

イターやクリエイターの育成に加え、前述の新たな交流拠点「umino わ」には縫製店を設け、地域住民らを雇用。店内にコインランドリーを併設したのは、町民の生活と観光を交差させるための工夫です。

公社のメンバーは約20人。その周辺にはSNSなどで緩やかにつながる町内外のネットワークがあります。多彩なメンバーの発想力と行動力は町のピンチ時にも躍動。新型コロナ禍で来客が減った飲食店のため、宅配サービスのシステムを構築し、1か月で1730食を町民に届けました。

9. 仲間とともに地域再生

ソリッソリッの来客数は令和元年が約15,300人で町観光客実数の約21%でしたが、そのぎ茶のセレクトショップ開店に伴い施設をリニューアルした令和2年は約15,500人、令和3年も約16,900人と増加しました。コロナ禍で町全体の訪問客数が約70%減少する中、地域のにぎわいを下支え。公社の取り組みはマスコミにも多く取り上げられ、町の認知度向上に寄与しています。令和3年には、全国の地方新聞等が表彰する「地域再生大賞」で「地域の未来賞兼九州・沖縄ブロック賞」を受賞することができました。



受賞を喜ぶ公社の仲間たち

私は自身を「地域のパシリテーター」と名乗っています。この町には面白いことを考えている人が実は多いのです。私はその使い走りとして、表現できる場を創っているだけです。人々が程良くつながりながら、日々育まれている千綿地区の「場」。そこから「ミドリブ」メンバー飯塚さんのように、挑戦を諦めない、やりたいことを思い切りやれる、そんな人が次々と生まれています。今後も「まちづくりは人づくり」を体現しながら、唯一無二の地域づくりを推進していきます。

地域づくり表彰

真岡まちづくりプロジェクト（栃木県真岡市）

真岡まちづくりプロジェクト

私の未来は私がつくる

若者と大人による社会実験がまちのエネルギーに



1. 真岡市の概要

真岡市は栃木県の南東部に位置し、東に連なる八溝山地、西に流れる鬼怒川を抱える自然豊かな都市です。

市の面積は 167.34 平方キロメートル、人口 79,539 人。かつては農業を産業の基盤とするまちでしたが、現在は 94 社におよぶ企業が操業する大規模な工業団地を有するハイテク都市として発展を続けています。農業・商業・工業がバランスよく調和した理想的な地方都市です。

現在、図書館、子育て支援センター、地域交流センターからなる複合交流拠点の整備事業を進めており、関連して中心市街地の活性化を目指して、市民協働のまちづくりとなる、真岡まちづくりプロジェクト「まちをつくらう」（以下「まちつく」）を展開しています。



生産量日本一のいちご

2. 活動開始の背景・経緯

「まちつく」を開始するきっかけは、2019 年策定の「真岡市まち・ひと・しごと創生総合戦略」で、市内在住の高校生に行った居住意識のアンケートにおいて、平成 27 年から令和元年の 4 年間で「真岡市に将来も住みたい」が 55.0%から 35.6%に急低下してしまったことでした。

同様に 2019 年策定の「真岡市総合計画」で目指す、「真岡市に住みたい、働きたい、子育てしたいと希望を持ち、楽しさが実感できる都市（まち）の実現」と、実際に居住している高

校生の意識と乖離に、市では大きな危機感を持つこととなりました。

そこで新たに、若者が地域に関わり、まちづくりを「自分ごと」として考え、一人一人が住んで良かったと実感できるまちづくりを進めていくことが必要であると考えました。

文化財や一級河川の五行川など、真岡市の中心市街地にありながら、利用者が少なく、十分な利活用が図られていない場所を、「もったいない公共空間」として選定し、高校生や大学生、地域の大人たちによる、まちづくり実験を行い、まちに活力をもたらすことを目指して、令和 3 年 4 月、「まちつく」は始まりました。



利活用前の五行川河川緑地

3. 「実験すること」

「まちつく」初年度は、高校生以上 20 名を一般公募しました。募集にあたっては「公共空間を活かしながら、市民の手によるまちづくり実験を行ってみませんか」として、企画提案にとどまらずに、実際に社会実験までを行うとしたことが「まちつく」の特徴です。参加者が、企画・運営の過程から主体的、能動的にまちづくりに参画し、「実行」することを大切にしています。

社会実験は、12 箇所の「もったいない公共空間」から、五行川河川緑地や、県指定有形文化財の岡部記念館「金鈴荘」、市役所新庁舎の市民プラザ「青空ステーション」、二宮コミュニティセンター、真岡鐵道の無人駅である久下田駅など、フィールドワークを通して、メンバー自身が魅

力を感じた 5 箇所を活動の舞台として選び、アイデアを出し合いながら企画を練り上げ、実行しました。



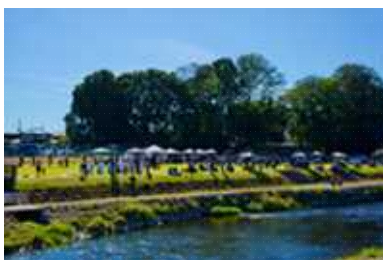
自分の足でまちを巡る

そのうち五行川河川緑地は、殆ど利用されていない芝生広場でしたが、大学生からの、誰にも知られていないのはもったいない、たくさんの人に、この場所で「おしゃピク（おしゃれピクニック）」をしてもらいたい、ドッグランを作って犬と遊んでもらいたい、映えるモニュメントを作って写真を撮りたい、という提案を元に、学生が中心となってキッチンカー等の出店募集も行い、ピクニックマルシェとして約 2,400 人が来場する企画が実現しました。ステージでの催し物などが行われる従来型のイベントとは異なり、ピクニックマルシェでは、レジャーシートを持参した家族や友人、愛犬とドッグランを訪れた人々を中心に、川辺でくつろぎながら時間を過ごすという、これまでにはなかった空間を作ることができました。このピクニックマルシェを機に、河川緑地はその後、散歩で訪れる人が増え、中高生が放課後にサッカーや、おしゃべりをする光景が日常化することになりました。

また、文化財である金鈴荘は、文化芸術の発表の場として、市内の真岡女子高校の茶華道部による生け花や、琴部による演奏会を開催しました。感染リスクが比較的低い屋外の庭園を青空観客席として利用することで、建物と一体となる和の空間作

りにも成功しました。その結果、来場者アンケートでは、今後も文化活動の場として活動を継続してほしいとの回答が100%となり、第2回発表会にも繋がりました。

また、二宮コミュニティセンターでは、図書館のリサイクル本を活用した青空図書館を企画したことで、二宮図書館の利用者増にも結び付き、ドッグランでは盲導犬協会への募金を募ったところ、55,000円のご協力を得ることができました。その他、青空ステーションや久下田駅での取り組みも合わせて5箇所9回の社会実験によって、延べ5,600人の参加者を得ることができました。



五行川河川緑地のピクニックマルシェ

4. 活動の広がり

五行川河川緑地でのマルシェを皮切りに、多くの集客を得る成果を上げられたことで、「まちつく」の活動を見た市民から、協力の申し出や、自分たちでも新たに企画したいとの声が上がると、多くの方の賛同をいただきました。結果として、令和3年度の活動では、観光コンシェルジュや福祉団体、地元企業、市内高校、建設業協会をはじめとする58団体にご支援ご協力をいただくことができました。



アートで福祉団体とコラボ

2年目となる令和4年度は、学生に限定した20名の募集に対して、41名の応募をいただきました。募集案内で訪問した高校では、「地域貢献やまちづくりに関心のある学生は多いが、新型コロナウイルス感染症の感染拡大によって、直前に中止になる

ことがあり、学生のモチベーションが下がっている。そのような中で、「まちつく」はコロナ禍に始まり、感染対策を行いながら、積極的に活動していることで、生徒が安心して参加できる」との意見もいただきました。

「まちつく」では、元々目の前にあった地域資源の、特に屋外空間の効果的な活用や、大規模なイベントの開催ではなく、近隣の方が、日常生活の延長で利用することを目的として活動してきたことで、コロナ禍でのニーズを満たした上でまちに賑わいを生み出すことができました。その点が評価されていると感じています。



令和4年度のまちつくメンバー

5. 継続するために

「まちつく」は、一過性のものに終わらないように、今後も継続していくことを強く意識しています。若者をまちづくりに巻き込む企画は、学生の進学、就職に伴って短期間の活動になりがちなため、2年目は改めて学生限定で募集を行い、1期生の学生メンバー5人は継続して、運営サポートとして関わることで、これからのまちづくりを担う人材の育成も担っています。また、地域の大人も同様に、一部の熱量ある人間が活動を続けるのではなく、地域の誰もがまちづくりに参加、協力できるような仕組みを作っていくことが必要と考えています。

また、自立した活動を行っていくには財源も重要です。補助金を活用するだけでなく、盲導犬協会への募金による社会貢献活動や、マルシェの出店料による収益を得ることも意識しています。

さらに、情報発信も重要です。活動への関わりを広げていくためには、活動過程を発信して、継続的な活動であることを知ってもらうこと、共

感してもらうことが重要です。

自分にも何かできるのではないかと、自分もやってみたい、と思えるには、活動しているメンバーの動機やまちづくりへの想いを伝えることが必要であるため、地域おこし協力隊によるインタビュー記事を作成し、WEBや市広報紙で発信しています。



真岡市長へ活動報告会と寄附

6. 展望

メンバーの大学生は「これまでの活動で初めて、自分でやっている実感を得られた。自分でアイデアを出すのが楽しいし、記憶に残る活動だった」、「活動をきっかけに、真岡市をもっと住みやすいまちにするにはどうすればいいか考えるようになった」と語っています。

「まちつく」の経験を通して、真岡市を知り、地域と何らかの関わりを持ちたいという人が増えることが、さらに地域への愛着を生み、まちづくりに繋がっていくはずです。

若者の活動を見た、地域の大人からも、参加の要望があるなど「まちつく」がまちを動かす、新たな活力になりつつあるのを感じています。



一歩踏み出す

この取り組みは、一人の偉大なスターの100歩では継続していくことができません。そこに住む100人が、小さくても新たな一歩を踏み出すことで生み出される100歩が、真岡市がもっと住みたいまち、住んで良かったと思えるまちになると信じて、活動を続けていきます。

地域づくり表彰

団体名（埼玉県北本市）

合同会社 暮らしの編集室（埼玉県北本市）

合同会社 暮らしの編集室

代表社員

岡野 高志

1. 北本市の概要

JR 高崎線で東京から 50 分。埼玉県の中央辺りに北本市はあります。

一見すると典型的なベッドタウンですが、実は旧石器時代から人が住み続けている歴史のあるまち。そんな北本市が近年、地域づくりの分野で少しずつ脚光をあびています。

マチナカに次々とシェアキッチンがオープンし、市役所ではマーケットが開催され、魅力的なお店が少しずつ増えています。市内にある築 50 年、2000 戸の大型団地「北本団地」では、シャッター商店街にユニークなお店がオープンし、若い入居者が増えています。



北本団地商店街

2. 活動開始の背景・経緯

【活動概要】

暮らしの編集室は埼玉県北本市を拠点に、新しいまちの可能性を生み出す「まちづくりのチーム」です。クリエイティブな発想でまちを見つめ直し、北本市内外の魅力的なモノコトヒトを「つなげる」ことを目的としています。

主に、空き店舗を活用したエリアリノベーション事業を行っており、2019 年には北本市の中心市街地地域にシェアキッチン「ケルン」をオープン。その後、2021 年 5 月に 2 店舗目となるシェアキッチン「北本団地中庭」を北本団地商店街にオープンし、2022 年 5 月には同商店街にシェアアトリエ&ギャラリー「まちの工作室 てと」をオープンしました。

その他にも、マーケットを通して地元愛を醸成する「マーケットの学校」など、北本市の移住定住プロモーション事業に取り組んでいます。



北本団地中庭

3. 5 者連携によるプロジェクトチームの結成と実践

北本団地では、「北本市・UR 都市機構・良品計画・MUJIHOUSE・暮らしの編集室」の 5 者で連携し、「北本団地活性化 project」として活動を行いました。

北本団地には、団地中心部に 15 か所ほどの店舗付き住居の商店街がありますが、営業を行っているのは数店舗であり、うち 10 か所ほどはシャッターが閉まっている状況です。

団地商店街のシャッター街化、団地住人の高齢化やコミュニティの希薄化など、様々な課題を解決するために、暮らしの編集室が地元プレーヤーとなり、まちの新しい可能性を模索しました。



プロジェクトチーム結成！

4. 中の人。外の人。どちらも居場所となる地域づくり

北本団地の課題である商店街のシャッター街化や住民の高齢化、コミ

ュニティの希薄化は、団地自体が団地住民だけの場所として内向きに機能してきた事に起因すると考えています。

暮らしの編集室では、自治会や居住者の皆さんとのコミュニケーションを取りながら、団地に住んでいなくても、団地に関われる仕組み作りを実践しています。北本団地へ様々な形でかかわる関係人口を増やすことで、将来的に団地住民を増やすことや団地への愛着度向上を図り、長期的な視点で課題解決を図る、地域づくりのサイクル構築を目指しています。

具体的には「北本団地中庭」がオープンする一年以上前から、団地自治会や団地商店街の皆さんと、団地の良さや魅力を話し合うワークショップ「北本団地未来会議」を数回開催し、メンバーで話し合った団地の魅力や要素から、シェアスペースの方向性やコンテンツを検討してきました。もちろん、このようなワークショップにも団地外の関係者に入ってもらうことで、様々なプレーヤーが団地について考えていく試みを、プロジェクト当初から実践してきました。

「北本団地中庭」のジャズ喫茶では、団地在住の方が多く来訪し、週末のジャズライブでは団地外の方が多く訪れます。また、中庭で開催されている企画イベントも、団地に住んでいない人や団体が開催しているものが多く、北本団地への日常的な関わりが生まれています。

新型コロナウイルスの影響で開催できなかった、夏祭りの代替となる子供向けイベントを、団地自治会と様々なメンバーが協働して開催するなど、コミュニティサイクルの小さな芽が生まれています。

加えて、物件の改装には北本市の

「ふるさと納税型クラウドファンディング（GCF）」を活用し、200 万円以上の資金調達を達成しました。GCF以降に寄附者の方を改装したスペースに招き、お披露目会の開催や、定期的な情報発信を行うなど、多様な団地への関わりづくりに挑戦しています。

団地を住民だけではなく外にも開かれた場所として再生することで、コミュニティの輪が広がっています。



イベント開催の様子

○今後の展望と目標

「北本団地中庭」は 2021 年 5 月のオープンから一年余りですが、月間 20 日以上での営業を通し、様々な人が集うコミュニティの拠点施設として成長しています。この場所を起点として、北本団地商店街に 2 店舗目となるシェアギャラリー&アトリエ「まちの工作室 へと」をオープン(2022 年 5 月)しました。

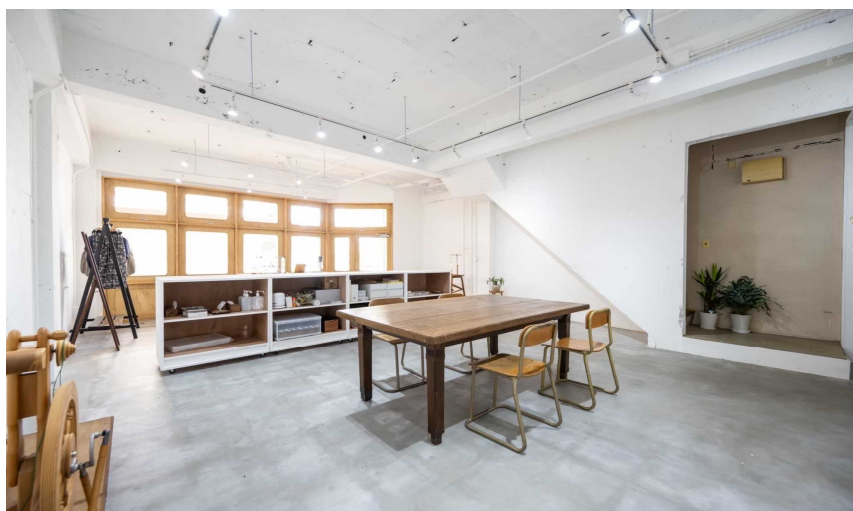
現在は、新たに陶芸とサボテンの店を開きたい方や、写真館を開きたいカメラマンと団地の空き店舗活用について調整を進めており、着実にエリアへの波及効果が生まれています。空き店舗等をシェアすることで、低い負担での開業を可能にし、起業・創業を希望する方の支援にもなっています。

また、定期的なマーケットの開催や、公共広場を活用した防災イベントの企画なども調整を進めています。団地自治会や商店街とは、年に一度の大きなお祭りの企画会議と一緒にするなど、ゆるやかにコミュニティサイクルが回り始めていると感じています。

この先 10 年・20 年という時間をかけて「この団地が大好きだ」と、私たちも含め胸を張って言える人を増やして行くことが、団地プロジェクトの目標です。



ジャズライブの様子



まちの工作室 へと



小さなマーケットから広がるコミュニティ

地域づくり表彰

ささラブ応援隊
(山口県萩市)

学校は地域の宝

学校存続に向けて

ささラブ応援隊
隊長

ひろた まさお

廣田 雅央

文責

ふなき よしひろ

佐々並小学校長

船木 美弘



1. 萩市の概要

萩市は、山口県の北部に位置し、北は日本海に面し、東は益田市（島根県）、津和野町（島根県）との県境に接しています。気候は、沿岸部においては対馬海流の影響を受けて比較的温暖であり、中山間部においては盆地特有の気候で、変化に富んだ豊かな自然環境を有しています。

また、日本で唯一「江戸時代の地図がそのまま使えるまち」といわれるほど、毛利藩政期に形成された城下町のたたずまいが都市遺産として今なお現存しているまちです。また、吉田松陰をはじめ高杉晋作や伊藤博文など近代日本の夜明けを告げた人々を輩出した「明治維新胎動の地」です。さらに、平成27年7月に萩反射炉、恵美須ヶ鼻造船所跡、大板山たたら製鉄遺跡、松下村塾、萩城下町の5つの資産が、世界遺産に登録され、萩固有の有形・無形の資産を活用し、新たな観光形態である「学ぶ観光」・「教育観光」にも取り組んでいます。



萩・明倫学舎

2. 活動開始の背景・経緯

萩市旭地域佐々並地区は、萩市の南部を占め山口市との市境に位置する農村集落です。江戸期には、山陰の萩城下町と山陽の三田尻（防府市）を結ぶ街道「萩往還」の中間点に位置することから、参勤交代などの際に藩主が休息する御茶屋を中心とした宿駅機能を有する集落として栄え

ました。現在も歴史的な街並みが色濃く残る佐々並市は、伝統的建造物群保存地区に指定されています。

かつては栄えた佐々並地区ですが、現在は人口減少と少子化が著しく進行しています。地区唯一の学校である佐々並小学校の児童数は、昭和30年代の約400人から令和2年には16人まで減少しました。また、同時点で地区内には未就学児がいないことから、在校生が全て卒業する令和8年3月には休校となる予定でした。

こうした状況の中、学校と保護者は懇談を重ね「小学校を存続させたい」という思いが一致したことから、令和2年12月に「ささラブ応援隊」を結成し、佐々並地区への子育て世代の定住を促進する活動を始めました。



伝統的建造物群保存地区

3. ささラブ応援隊の結成

休校か学校存続か？どちらか一方しか選択できません。何もしなければ休校になります。

今後の動向を考えるために、令和2年10月に学校と保護者の懇談会を開いて現状と危機感を共有しました。休校の時が明確になったことで危機感を募らせた保護者は、「地域の学校はずっと続いて欲しい。子どもたちに母校を残してあげたい。」という思いが切実となりました。しかし、保護者や学校だけの努力では限界がありました。

そのため、令和2年12月に「今で

きることを、今やろう」と、保護者、地域、行政そして学校が連携する「四輪駆動」で子育て家族の定住促進活動を実践する「ささラブ応援隊」が結成されました。



4. 実働 ～見学会の実施

残された時間がなく、早急でしたが、結成2ヶ月後の令和3年2月に新1年生の確保を目標に「第1回佐々並小学校と住まいの見学会」を開催しました。学校と少人数指導、先進のオンライン授業の魅力を伝える公開授業、児童による佐々並紹介、地域の人と触れ合う地区の散策、行政の支援で移住に必要な住まいを紹介する空き家の見学を実施しました。



空き家の見学会

保護者はポスターを各所に掲示依頼するなどPRに奔走し、地域情報紙やテレビ番組でも紹介された効果もありました。見学会当日は、地域住民が組織する「どうしんでやろう会」による伝統的建造物群保存地区の案内も行われました。参加者のお土産として、地域の方が応援の言葉と共

に野菜やお米 200 kg の提供もありました。

危機感を持ちながら地域ぐるみで見学会に取り組んだところ、参加 7 家族のうち 3 家族から移住希望がありました。そのなかの 1 家族 4 人の移住がすぐに決まり、令和 3 年 4 月、今後ないと心配されていた佐々並小学校の入学式を実施することができました。学校や保護者だけでなく、地域全体の大きな喜びとなりました。

その後も 2 回目、3 回目と学校と住まいの見学会を実施、農業体験活動などのイベントの開催や移住希望者との関係づくりに取り組み、約 1 年間の活動で 計 4 家族 14 人（うち子ども 7 人）が佐々並地区へ移住が決まりました。おかげで入学式も令和 7 年まで毎年開催できる見込みとなり、地域の関心や支援も広がってきています。



移住第 1 号の子育て家族

5. 本当の課題

すべてうまく進んでいるように思いましたが、大きな課題に直面することになりました。

これまでささラブ応援隊で移住促進活動を行い、移住家族が 4 家族決まりましたが、実は、まだ移住の問い合わせが数件あります。なかには SMOUT（移住支援サイト）を通して他県からの問い合わせもあります。けれども、子育てをしている移住家族が希望する内容の売買や賃貸の空き家がなく、残念ながら移住の話が止まっています。住まいがあれば、子育て家族の移住が可能になります。

6. 住まい確保のための次の一手

現状のささラブ応援隊だけの取組では、住まいの確保がうまく進まないことを痛感しました。そこでこれらの解決のために、地域全体に呼びかけ、各地区の代表の方や地域のことをよく知る方々に支援をお願いします

ることになりました。

そこで、ささラブ応援隊の役員が協議を行い、「佐々並地区移住促進連絡会」を設立し、佐々並地区全体で空き家の活用を考え、空き家物件を確保していくことになりました。

そして令和 4 年 5 月 22 日に第 1 回の連絡会を開催し、佐々並地区の空き家物件の情報交換と確保についての協議を行い、地域が連携・協働した活動がスタートしました。早速、新規の空き家の情報を得ることができました。



情報交換用の資料

7. ささラブ応援隊の支援活動

(1) 魅力ある学校づくり

自然豊かな佐々並で、楽しく元気に農業や自然体験学習など佐々並の魅力を感じする「ささラブ学園」を年間 12 回程度、佐々並小学校が開催しています。小学生ならだれでも入園できます。また、土・日曜日、夏休み中は他の地区の児童の参加もでき、移住のきっかけになっています。

ささラブ応援隊として、体験活動の準備や当日の運営の支援を行っています。また、地域の方に先生役として活躍いただいています。



ささラブ学園 稲刈り教室

(2) 魅力ある地域づくり

移住希望者に「住んでみたい」と思ってもらうためには、住民と移住者の関係づくりが重要だと考えています。そのため地区の魅力である伝

統的建造物を改修し、住民と地域外の人が交流できる施設を、市が整備しています。この施設で、食事や調理を通じて子どもとワイワイと楽しめるイベントを開催し、移住希望者との関係づくりに取り組みます。



新しい拠点の予定場所

(3) マッチング お見合い大作戦！

地域の強い要望を受け「地域の独身者の出会いの場づくり」を進めています。ささラブ応援隊を中心に企画・運営を進め、第 1 回のイベントを令和 4 年 7 月 24 日に実施しました。参加者は、男性 15 名、女性 10 名で好評だったことが伺えます。今後も定期的に出会いの場づくりに取り組み、地域での子育てや家族の誕生を温かく見守っていききたいと考えています。

8. 課題と展望

まだまだ手探り状態の「ささラブ応援隊」で、学校存続のためには児童数確保が必須です。佐々並小学校は、令和 8 年度からすべて移住家族の子どもになる予定ですが、これが学校存続のための「時代に応じた学校の姿」であることを、地域住民が理解の上で移住促進活動を行っています。何もしなかったら児童数が減って休校になってしまう現実がすぐ目の前にあります。「学校の灯を消さない」「学校は地域の宝」「やってみないとわからない」を念頭に置いて、地域住民全員が当事者として活動を推進していきたいと考えています。

佐々並を愛する思いや願いが一つになった時、学校が存続し、地域が活性化することを信じています。

今度も地域発展のための重要な四輪駆動として「ささラブ応援隊」の活動が続いていきます。

地域づくり表彰

久山町（福岡県久山町）

地域交流型シェアオフィスそらや ～空き家からはじまる、小さな幸せ～

福岡県久山町

町長

西村 勝



1. 久山町の概要

久山町は、福岡県福岡市の東に隣接する人口は9,321人（2022年8月末時点）の町です。半世紀にわたり、「国土・社会・人間の3つの健康づくり」をまちづくりの基本理念に掲げ、「健康社会」の実現を目指したまちづくりに取り組んできました。行政と町内開業医、九州大学久山町研究室が連携して始まった健診事業は「ひさやま方式」として世界に知られており、医学の発展に大きく寄与しています。また、日本が高度経済成長期の頃、町域の97%を市街化調整区域に指定して急激な開発や人口増加を抑制し、豊かな自然や田園風景を守り継ぐなど、全国的にも珍しいまちづくりを展開してきました。



久山町全景

2. 活動開始の背景・経緯

人口減少・高齢化が加速する中で、全国で増加している空き家が社会問題となっています。これまでの移住・定住促進策は、移住者に合わせた支援を行っていましたが、「人口が増えることが、本当に地域の幸せなのか？」という疑問が浮かんできました。地域住民の皆さまが抱く不安や抵抗感などを解消し、移住者を受け入れる風土をつくっていくことが不可欠であると感じていました。

そこで本町では、地域のニーズからアプローチする、逆転の発想で事業を展開していくことにしました。

具体的な手段として、地域の活性化に必要な「人・賑わい・仕事」の3つの要素を生み出す仕組みづくり

を行うことを目的に、拠点づくり（ハード面）だけでなく、地域との交流を進めていく機会づくり（ソフト面）を融合した「地域交流型シェアオフィスそらや」を行政が開設し、管理運営を行いました。地域の活性化につながる企画と運営、その他活動をオフィス利用者と行政が一体となって展開しています。



地域交流型シェアオフィスそらや 外観

3. 行政がつなぎ役の運営モデル

オフィス利用の申請時は町が利用者の面接を行います。利用の条件には、「久山町が好き」「地域交流に前向き」「地域活性化につながるビジネスを展開する意向がある」の3つを挙げています。また、地域にとって身近な場所となるよう住民の理解を得ていくことを大切に、施設の開設前から後に至るまで、事業（講演会や改修ワークショップの実施など）を進めてきました。

4. 「そらや」の活動

オフィス利用者は、利用者全員で「そらや利用者の会」を結成し、利用開始時から多くの交流機会を自発的に設けています。

1) そらや交流会

定期的に地域の方と一緒に食事などを囲み、会話を楽しむ交流会を開催しています。



そらや交流会の様子

2) そらやマルシェ



そらやマルシェのチラシ

「非日常を、日常に」をテーマに、茅乃舎料理長の料理講座や餅つきなどの体験を含むマルシェを開催してきました。現在は、音楽会やお茶会など、地域はもちろん、町全体を対象に交流イベントを開催しています。

3) そらや通信



そらや通信 2021年6月発行

利用者自身のことや活動内容を少

しでも多くの町民に知ってもらおうと、定期的に「そらや通信」を発行し、所在地域の全戸にあたる約 400 戸に利用者が手分けしてポスティングしています。

「交流」において大切にしている視点は、「楽しみ」を共有することです。それが人と人の距離を近づける一番の近道だと考えています。

5. 「そらや」の広がり

利用者の活動は、そらやの中だけにとどまらず、地域行事や町の事業にも積極的に参加するなど、活動の領域を町全体に広がっています。利用者の町への愛着が深まったことで、町の課題解決に向けて、さらなる人材を呼び込む「つなぎ手」になっています。

現在は、教育や福祉、産業分野などに広がっており、その事業の仕組みは、今後他自治体等への活用も含め検証が進んでいます。

1) チャレンジを後押し

幅広い世代の新しいチャレンジを後押しする機会も生んでいます。80代で結成される地域の「マスク女優」は短編映画祭に自作の短編映画を応募し、金賞を受賞しました。また、自身の経験を生かしてバーチャル観光を開催してみたい、子どもの見守りができる図書館を開きたいなど、利用者に起業の相談に来る方が出てきました。



映画制作に取り組む様子

2) 地域資源にスポットをあてる

そらや近くの遊休農地を活用した畑作業が始まりました。その畑で採れた野菜は地元のカフェやパン屋で使われています。また、町の農産物をつかったお菓子などをマルシェや町のイベントなどで販売しています。



出張「そらやワゴン」の様子

利用者がつなぎ手となり、町の養蜂場（久山産蜂蜜）と福岡市内の老舗ホテルとが連携した新商品を開発、販売するなど、地域資源の新たな販路開拓にも広がりを見せています。



新商品「グランドハニー」

6. 「そらや」の成果

1) 地域住民の協力

利用者が不在の間、そらやの庭の手入れ（草抜きや花植え）を地域の方が自主的に手伝ってくれています。



季節の花が彩るそらやの庭

その活動は、駐車場からそらやまでの沿道にも広がっています。そらやがイベントを開催するときなどは、積極的に声かけもしてくれます。何より、昨年の忘年会（2021年）で地域の方からいただいた、「1年もしたらみんなおらんくなると思っとな。もう3年もなるとやね、早かね。」という言葉。最高の褒め言葉です。

2 各種業界・メディアからの注目

地域との交流活動が共感を呼び、行政や各種団体、特に民間企業の間で話題となり、多様な分野から 300 名以上の方に訪問いただきました。新聞・テレビ等メディアにも多数掲載いただいています。また、空き家を町に寄附した方も東京から見学に

来られ、自分の育った家が地域に貢献する家として活用されていることを大変喜ばれていました。

3) 空き家の利用が増加

利用者の中から空き家等を活用した起業家が 1 名、2 拠点居住者が 1 名生まれました。そらやが所在する地域への移住者や空き家情報の問い合わせが増加しており、移住ニーズの高い地域となっています。

実際に移住した方の中には、そらやのような拠点をつくりたいと自宅に交流スペースをつくった方もおられます。2015 年時点でそらや所在地域（猪野地区）で 23 件確認されていた空き家のうち、19 件が解消しています。

7. 「そらや」の思い

地方では、人口を含め「数」が豊かさのモノサシになっています。そのため、数を補うことばかりに目を向けてしまいがちです。そうした中で、大切だとわかっていても「人づきあい」や「手間」が面倒なこととして、片付けられてしまいます。

そらやの取り組みは、「人」と「人」が顔を合わせ、話をし、笑いが生まれる。シンプルに、「人づきあい」を続けた結果です。手段ではなく、「思い」から始まる地域づくりは、人を集め、行動を変え、さらには心の豊かさにもつながることがわかりました。デメリットをメリットに変える大きな可能性を秘めています。

8. 課題と展望

オフィス利用者と行政が定期的に利用することにより施設の開放日などを設けていますが、地域の交流拠点としてさらに活用を推進していくには、収益性を保ちながら施設運営を行う組織や団体等をつくる段階にきたと捉えています。

今後は、公共施設の管理運営をビジネスにも結びつけていくことで、持続可能な事業形態を生み出し、継続的に地域の活性化に寄与することを目指します。

一般社団法人ふるさと楽舎（広島県広島市安佐北区）

耕作放棄地となった棚田を復活させ、 育てた米で復興の酒「大林千年」誕生

一般社団法人ふるさと楽舎

代表理事

秦野 英子

1. 広島市安佐北区の概要

広島市は、広島県西部に位置し、中国・四国地方で最大の人口を有する政令指定都市です。南部の中心市街地は大企業の支店や官公庁の出先機関が多く拠点を置く中国地方の中核都市ですが、南は瀬戸内海に面し、中心市街地を取り囲むように西部・北部・東部は丘陵地帯となっているなど、身近に海や山といった自然に親しむこともできます。

市域は、8区で構成されており、私たち一般社団法人ふるさと楽舎が活動する安佐北区は市の北東部に位置し、面積は市域の約4割を占めています。

近年は古くから商人のまちとして栄えてきた可部地域の発展が目覚ましく、平成29年3月にJR可部線が電化延伸したことを契機に、終着駅のあき亀山駅前には令和4年5月に広島市立北部医療センターが完成するなど、広島市北部及び近隣市町の中核として発展しています。

2. 活動開始の背景・経緯

当法人の活動拠点である大林地区桧山は、可部の中心市街地から車で約20分ほど北の山中にある集落で、平成26年8月20日の豪雨災害で被災した場所でもあります。被災後は過疎化及び高齢化に拍車がかかり、担い手不足から耕作放棄地となる棚田が増加していましたが、復興支援を契機に地域の抱える課題を知った若者有志が、美しい棚田を取り戻し地域を元気づけたいと活動を開始し、平成30年度には一般社団法人ふるさと楽舎を設立しました。



被災休耕田の復旧

3. 大林千年の誕生と活動の広がり

「1000年先も集落であり続けること」を合言葉に、地域外の若者と地域の住民が共に活性化策を検討し、地域再興ののろしとして最初に取り組んだのが日本酒づくりです。

収穫量不足や害虫被害に悩まされながらも、4年の歳月を経て日本酒の仕込みに必要な米の収穫量を確保し、復興の酒「大林千年」が誕生しました。その他にも棚田での花の種植イベント等を行っており、地域外に大林ファンを増やす活動を行っています。

豪雨災害復興支援に來ていた広島大学ボランティアサークルの学生や地元大学生、自治会有志、地元の酒蔵、市役所職員等、地域内外から継続的に活動への参加があり、酒プロジェクトや自然体験活動には、市内の複数の大学から延べ300人が参加し、よそ者・若者との交流が地域に活力を生んでいます。



田植えの様子

また、都市に隣接する中山間地域である地区の強みを生かし、誰もが活躍できるフィールドとするため、令和3年度末には、地元農家とともに「休耕田彩生会」を立ち上げました。休耕田を整え、地域外の人たちを受け入れ、耕作や自然観察フィールドとして解放することで、新たな支援者・仲間を増やすことを計画しています。

4. 地元企業との協働

大林地区や近隣の国道183号線沿いには製造工場が多くあり、製造過程で大量の水を使用しています。

SDGsの時流もあり、工場間で地域課題解決の機運が生まれていましたが、当法人の活動がマスコミ等で周知され始めると、企業から水資源及び里山保全に関する活動への協力や視察の問合せが増加しました。

現在は、大林の里山の現状を知るためのウォーキング視察会、植樹及び里山保全活動等ができる場を大林で提供し里山保全を実践することが可能な体制づくりをサポートするよう計画が進んでいます。

5. 安定的な収入の確保に成功

大林千年は地域の酒蔵の協力を得て開発したため、既存の販売ルートを活用して地域外に販売することができ、安定的に活動資金を得ることのできる仕組みとなっています。

なお、令和3年度の米は最上級である一等米の評価を得ることができたため、今後は、酒用の米をつくる農家を増やし、酒づくりが地域の生業として安定するように計画しており、定住者獲得も期待できます。



販売される「大林千年」

6. 地域資源の活用

豪雨災害によって被害を受けた棚田を復活させ、棚田の美しさを活かすことを模索した結果、棚田で育てた米で復興の酒造りを行うという活動につながりました。



地元の酒蔵と酒造り

また、米の品種として地域で伝統的につくられてきた「ヒノヒカリ」を使い、収穫した米は、地域の神社の名前にちなんで「照日米（テルヒマイ）」と名づけるなど、地域にもともとあった地域資源を新たなブランドとして発信しています。



照日米

自然や文化を活かした活動も重視しています。

大林地区には、都市圏では珍しい野鳥が生息しているため、専門家を招いてその調査や観察会・自然体験活動を実施しています。

約400年前から続くと言われる盆踊りにも、酒づくりに参加している地域外の若者とともに、踊り手として参加し、その状況を発信しています。



熊谷踊り

7. 創意工夫と成果

私たちは、ピンチはチャンスに変えることができると考えて活動しています。

豪雨災害というピンチが地域外の若者と地域を結びつけ、地域の復興へと向かったように、耕作放棄地の増加というピンチも、その場を地域外の若者の思いを実現させることのできる場所として捉え直し、酒づくりという発想につなげることができました。

酒造りという提案は、地域の農家にとっては突飛な発想でしたが、ともに災害を乗り越えた絆があったため、当法人の挑戦を地域が受け入れ、大林千年の誕生へとつながりました。

また、害虫被害によって米の収量が少なく日本酒の醸造ができなかった時も、地元のビール醸造会社の協力で、米を使った地ビール「郷乃米麦酒」を制作することができ、大林ブランド初のお酒となりました。

今でも、大林千年と並んで地域に愛されるビールとなっています。



郷乃米麦酒

8. 他の活動団体との協働

当法人の活動により地域住民自らが地域課題解決に取り組む気運が醸成された結果、間伐材活用を目的とした「大林間伐材再生研究会」が発足しました。

豪雨災害時に山麓に流れ落ちる間伐材は、災害の被害拡大の要因として問題視されていますが、同会は間伐材を活用した商品を開発し、商品加工のために間伐材を山から搬出することで災害時に流れ落ちる間伐材の数を抑制し、被害を抑制する目的で活動しています。

また、間伐材の搬出技術を持った人材の育成や加工品販売による収入も期待できるため行政からも注目を浴びています。

当法人も協力し開催した第一回木と食の里まつりは、住民の手づくりイベントにも関わらず、約3,000人の来場があり大盛況となりました。



木と食の里まつり

その他にも、トヨタの協賛事業も開催しています。当法人の活動が注目され、今まで宮島等で開催されて

いた「TOYOTA SOCIAL FES!!2022」が、海を豊かにするための山の活動のフィールドとして大林地区桧山を舞台に継続的に開催されることとなりました。

棚田の草刈りを行い、コスモスの種を植える本イベントには募集定員以上の申込がありました。あいにく雨天による中止となったため関係者で種植えを行いました。開花に合わせて開催予定のイベントにはすでに多くの参加希望者がおり、大林地区のファンが確実に増加していることがわかります。



トヨタソーシャルフェス

9. 課題と展望

この活動は30年を一つの区切りと考えています。その第1期前期の目標であった「酒造り」という礎と他団体連携などの活動の種まきはできました。今後は、この礎に蒔いた種を芽吹かせ、花を咲かせることに軸足を移します。そのためには、より多くの人財の活動への加入が不可欠です。

大林地区桧山のみならず、大林地区は様々な魅力のある地域です。豊かな水を資源にした製造業の工場も多く、雇用の場があります。よそ者を受け入れる風土もあります。都市部から近い中山間地域という地の利があります。

これらの魅力を「兼業」「半農半X」の暮らし方を志向する世代に届け、大林のフィールドで「地に足をつけた暮らしを営む」人財を増やすこと。これこそが、私たちが目指す「大林千年の里づくり」です。

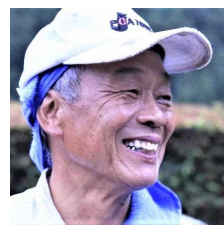
地域づくり表彰

特定非営利活動法人 美郷宝さがし探検隊
(徳島県吉野川市)

特定非営利活動法人
美郷宝さがし探検隊

理事長

あかいし みつひろ
明石 光弘



地域の「人・自然・伝統・文化」を美郷の「宝」として

1. 吉野川市の概要

吉野川市は徳島県のほぼ中央に位置し、平成16年10月1日に鴨島町、川島町、山川町及び美郷村の4町村が合併した市です。

市を構成する4つの地域は、鴨島町は商業の町、川島町はかつての城下町、山川町は霊峰「高越山」が育む自然豊かな町、そして美郷は日本の原風景がそのまま残る豊かな里山であり、都市と自然とのバランスが取れたまちです。

2. 活動開始の背景・経緯

吉野川市美郷は、合併前の旧美郷村から過疎化や住民の高齢化による地域活力の低下や将来に向けたまちづくりが懸念されるようになりました。

このことから、失われつつある美郷の伝統や文化資源を継承しながら地域の活性化を図り、住民が自信と誇りをもって生活できる環境の創造を目的として、旧美郷村役場が地元住民に呼びかけを行い、平成10年7月に美郷宝さがし探検隊を設立しました。

美郷宝さがし探検隊の活動は、地域の魅力の案内役と継承者(隊員)を増やす取組みとともに、地域イベントを担う役割として、これまで地道に活動を広げ、平成22年9月には特定非営利活動法人の認証を受けました。

現在は、吉野川市から「美郷はたる館」の指定管理者の指定を受け、地域拠点として、また、地域の窓口コーディネーターとして美郷のイベントや移住促進、地域外の方々との交流など多くの活動に取り組んでいます。



美郷宝さがし探検隊のメンバー

3. 地域の風景を「宝」にした活動

にほんの里100選に指定されている「高開の石積み」は、長く連なった石垣が、急斜面に何段も積み上げられており、城塞のような光景に圧倒されます。300年以上前の江戸時代から、南向きの陰しい土地を切り開いた山村集落の段々畑は、この石垣によって支えられてきました。段々畑を中心としたモザイク状の土地利用は、人と多様な生き物が暮らす豊かな空間を生み出しています。



にほんの里100選 高開の石積み

美郷宝さがし探検隊では、高開で石積み名人であった故高開文雄さんの指導のもと、石垣の修復活動を行うとともに、地域内外のボランティアの協力を受け、地域の環境保全を行ってきました。現在では、故高開文雄さんから学んだ大学生が一般社団法人石積み学校を設立し、高開石積みの修復だけでなく、全国で石積み技術の伝承に取り組んでいただいています。



石積み学校(企業の新人研修等)

また、毎年、企業の協力のもと、新人研修等のフィールドとして活用いた

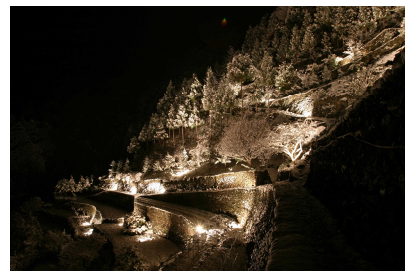
だいており、石積み修復活動を通じて、地域の環境保全に協力いただくとともに、美郷を知っていただくキッカケにも繋がっています。



高開の石積みシバザクラ

高開の石積みは、毎年4月中旬になると、石垣のあちこちに植えられたシバザクラが美しい花を咲かせます。

美郷宝さがし探検隊は、これをたくさんの方に見てもらいたいと思い、開花時期に合わせて「シバザクラまつり」の開催や12月には「石積みのライトアップ」を実施してきました。



高開の石積みの幻想的な姿

12月の石積みのライトアップでは、昔のように提灯をもって暗い足元を照らしながら、石積み歩き散策し、探検隊のメンバーがお接待のアメ湯を提供するなど、美郷の風景や人を好きになってもらい、「美郷にまた来たい」と思っただけの取り組みを行ってきました。

残念ながら近年は新型コロナウイルス感染症や鳥獣被害の影響により、シバザクラまつりは開催できていませんが、再開できることを願い、これからも地域の環境保全活動に取り組んでいきます。

4. 天然記念物ホタルの保護から 創意工夫

国の天然記念物に指定されているホタルは、四国では美郷だけです。

美郷宝さがし探検隊では、ホタルの発生期間である5月下旬から6月中旬まで地域住民や小学校、企業に協力をいただき、飛翔調査や啓発活動、クリーンアップなどホタルの保護活動に取り組んでいます。



国の天然記念物 美郷のホタル

また、ホタルの発生時期には、毎年約3万人の方が美郷を訪れる「美郷ほたるまつり」を開催していましたが、近年、新型コロナウイルス感染症により中止となっています。

新型コロナウイルスの影響で中止となったほたるまつりの代わりに、令和3年には徳島県内の映像作家の協力のもと、ホタルの舞う様子を360度カメラで捉えたホタルのVR画像等を美郷ほたる館のホームページに公開し、コロナ禍においても美郷のホタルを少しでも多くの方に楽しんでいただける工夫をしています。

5. ホタルの川を自然学習の場に



川の学校 カップ教室

ホタルが棲む川田川には多くの水生生物が生息しています。

美郷宝さがし探検隊では、子どもの頃に体験した自然体験が、自然を大切にする・故郷の美しさを思い出すきっかけになってもらえればと、子どもたちを対象に川の生き物観察や昔なつかしい手作りの竹の水鉄砲などで川遊びができる「川の学校カップ教室

室」を開催しています。川の学校を通じて美郷の自然や知恵を学ぶ場所づくりを行っています。

6. 四季を活かした活動

自然豊かな地域である美郷は、四季を活かし、梅の花まつりや季節に合わせたウォーキングイベントの開催など、年間を通じてイベントを行っています。



季節ごとのウォーキングイベント

平成20年には全国で初めて美郷地区が「梅酒特区」の認定を受け、酒蔵5蔵・農家民宿3軒と連携し、毎年大勢の観光客が訪れる「美郷梅酒まつり」を各事業者と協力して行ってきました。梅酒まつりは、一つの会場で開催する訳ではなく、美郷地域の各所にある酒蔵や農家民宿を巡ることで、美郷のすべてを感じることができます。

今年は、新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止を図りつつ、3年ぶりに美郷梅酒まつりを開催しました。



全国初の梅酒特区



地域を巡る 梅酒まつり

7. 成果

美郷宝さがし探検隊では、美郷の「人・自然・伝統・文化」を美郷の「宝」として、これまで地域の環境保全や地域おこし活動を行ってきました。

四季を活かしたイベントでは、年間約4万人が美郷を訪れ、川の学校「カップ教室」では約1,500人の子どもたちが参加しています。

また、川の学校のほかにも、隊員が先生となり、ほたるかご作りや苔玉作りなど地域の伝統を継承する講座を行っており、人気を集めています。



ほたるかご作り体験

8. 課題と展望

美郷における高齢化や後継者不足は、依然厳しい状況ですが、美郷宝さがし探検隊のこれまでの活動により美郷内外にたくさんの協力者が増えてきました。

また、近年は吉野川市の若い世代を中心とした「NPO法人Tane」が結成され、美郷におけるイベントの手伝いなど連携が始まり、活動の持続性が大いに期待できるようになってきました。

美郷宝さがし探検隊の「やってみよう」の気持ちを次世代に受け継ぐとともに、これからも美郷の「宝」を発掘していきます。



NPO法人 Tane

美郷の魅力を感じて、美郷に来たい！手伝いたい！と思える地域おこし活動や情報発信を行い、美郷へ訪れる方を一人でも多く増やす取り組みを継続していきます。

また、これは課題ではありますが、美郷宝さがし探検隊が持続的に活動を継続していけるよう、団体の収益確保をより一層検討していきたいと考えています。

「地域づくり表彰」歴代授賞団体 現在の活動状況

令和4年度に39回目を迎えた「地域づくり表彰」への応募総数は、のべ2,431件にのぼり、このうち、優良事例と認められ、国土交通大臣賞、国土計画協会会長賞、全国地域づくり推進協議会会長賞等を受賞した事例は令和4年度授賞の8団体を加えると全国で273件にのぼり、現在も各地域で多くの受賞団体が活躍しています。

今年度は、山形県と広島県、福岡県において授賞以降も活動を継続している3団体に対して、活動場所を訪問して現在の活動状況についてお話を伺いました。

山形県

「金山町」

(平成15年度「第20回」国土交通大臣賞)

訪問日：令和4年7月20日（水）

訪問先：金山町 佐藤町長、庄司総合政策課長、高橋課長補佐、松田環境整備課長補佐、柴田主事



著名な建築家や都市計画家により設計された金山にふさわしい町役場

平成15年度の授賞以降も住宅建築コンクールを実施し、景観条例にもとづく金山杉を使った「街並みづくり100年運動」を進めている。

コロナ禍で過渡期を迎え、時代に沿う新たなソフト面の取り組みに臨むにあたり、アンケートにより住民の声を聞き取り、若年層、特に女

性の求める活躍の場を創出するための取り組みに力を入れ始めていました。



毎年5月園児達が農業用水路に錦鯉を放流



金山杉と金山職人の技による「きごころ橋」



100 年以上前に金山杉と桂で建てられた母屋

広島県

「横川商店街振興組合・横川商店街連合会」
(平成 16 年度「第 21 回」国土交通大臣賞)

訪問日：令和 4 年 8 月 5 日（金）

訪問先：横川商店街振興組合 村上理事長、横
川商店街連合会 星野会長、横川エリアマネジ
メント連絡協議会 三谷事務局長



左から、三谷氏、村上氏、星野氏

平成 16 年度の授賞以降には、「アート」「ス
ポーツ・カルチャー」「バス」を三本の柱とし
た活動を展開。

「横川かんぱい王国」では三次市（ワイン）
と東広島市（酒）と連携して連合会の立ち上げ
を計画（コロナ禍に入り休止）。26 年継続して
開催の「ふしぎ市」ではコロナ前には 2 万人を
集客、毎年市長も出席し、地元中学校の協力を
得てポスターやチラシの作成、収益の全額を国
連ユニタール経由でウクライナへ寄付するな

ど、地域住民一体となった自発的な盛り上がり
をみせている。

また、「かよこバス」の復元では広島市立大
学の吉田先生（現副学長）やマツダの O B の方
等の協力を得て復元（2004 年に完成）した。

広島市の補助金で広島市から無料で借り受
けた空き店舗と商店街ビルの 1 箇所を改修し、
今年度、広島市立大学の補助金で、各施設の告
知とスケジュール管理などが出来るような仕
組みを作成してもらっていると同時に文化庁
の補助金を使ってアートマネジメントが出来る
人材の育成も行われている。

「なでしこリーグ 1 部」で戦っている横川の
地域住民が立ち上げた女子サッカーチーム「ア
ンジュヴィオレ広島」への支援活動（今期で解
散）や安芸太田町では指定管理を受けて「北別
府ファームプロジェクト」の主導など活動の幅
を広げていました。



横川駅前に保存展示中の「かよこバス」



組合事務局の入居する建物階段のアート作品



商店街ビルの外壁に描かれたアート作品

福岡県

「NPO 法人 久留米ブランド研究会」
(平成 27 年度「第 32 回」国土交通大臣賞)

訪問日：令和 4 年 7 月 26 日（火）

訪問先：NPO 法人 久留米ブランド研究会 矢次事務局長、公益財団法人久留米観光コンベンション国際交流協会 永江誘致広報課長、久留米市観光・国際課 吉武 様

平成 27 年度の授賞以降も「まち旅博覧会」を継続開催（毎年各プログラムはほぼ満員）、矢次事務局長による全国各地での講演、福岡大学での講義、「久留米くるくるチケット」の販売、業界団体との特産物の共同開発と、活動の幅を更に広げ、目先の利益を追うのではなく、交流人口を増やすために取り組まれている活動が地域に深く根付いていました。



久留米ブランド研究会 矢次事務局長

[久留米 まち旅博覧会 公式 Web \(kurume-machihaku.com\)](http://kurume-machihaku.com)



令和 4 年まち旅博覧会「櫛染(はじぞめ)体験」の会場、国の登録文化財「山辺道文化館」



プログラム講師による櫛染の手順説明



「櫛染体験」参加者で完成品を披露

令和4年度「地域づくり表彰」表彰式 実施報告書

(関係者用)

発 行 令和5年2月 発行
編 者 令和4年度「地域づくり表彰」事務局
問合せ先 国土交通省 国土政策局 地方振興課 渡部、馬場
電 話 03-5253-8403 (直通)